

Title	東山之會
Author(s)	愛甲, 弘志; 加藤, 聰
Citation	中国研究集刊. 2017, 63, p. 257-260
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/70157">https://doi.org/10.18910/70157</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〔研究会通信〕

## 東山之會

愛甲弘志  
加藤 聰

当会は中国古典文学研究者を中心に和漢比較文学の研究者らも集い、一年におおよそ八回前後開催され、現在は京都女子大学を会場とする。現在の参加者は、会場校に籍を置く愛甲弘志・加藤聰の兩名が世話役となつて、齋藤茂・下定雅弘・乾源俊・浅見洋二・中木愛・芳村弘道・上原尉暢・劉小俊・佐藤菜穂子・王宜瑗・姜若冰・張凌志・馮艷の諸氏を中心に、大阪大学・立命館大学・京都大学などに籍を置く中国の研究者らも加わつて、さながら国際会議の様相を呈している。

### その沿革と命名の由来について

当会の沿革を述べると、一九八〇年代の終わり頃、京

都大学（当時）の川合康三氏と大阪市立大学（当時）の齋藤茂氏の二人だけではじめた韓愈と孟郊の聯句の読書会にまで遡る。当初、川合氏の京都大学の研究室がその活動の場となつていたが、メンバーがひとり、またひとりが増えていき、とうとう研究室に入りきれなくなつたことから、会場を現在の京都女子大学に移すことになつた。爾来、三十年近い歴史をもつ研究会ということになる。

この会にはもともと正式な名前はなかつた。たとえば、『中唐文學會報』（一九九九年 中唐文学会）の「活動報告」にも、「中唐という時代を知るために」（愛甲記）と題して、当会の活動が紹介されているが、意外にも会の名称は記されていない。いま思い起こせば、読ん

でいた作品や書物の名前から、「聯句の会」とか、「御覽詩の会」、或いは会場になっている大学名から「京女（きょうじょ）の会」などと呼んでいたような気がする。それがやつと二〇〇二年の『日本中國學會報』第五四集の「国内学会消息」に当会の活動内容を掲載する機会を得て、さすがに名前がないのは具合悪いということでもとりあえず、「唐詩研究会」として紹介したものの、間もなく、いまの「東山之會」に改められた。この名前の由来は、会場である京都女子大学が東山の麓に位置していることによるが、あるいは晋の謝安が、一時、隠れて自由に心を遊ばせた彼の東山にも掛けていたようなところがあつたかもしれない。そしていまこれを「とうざんのかい」とは呼んではいるが、しかし「ひがしやまのかい」と呼ぶことについてもまったく意に介するものでもないのは、そもそもが名前にこだわらぬような会ではないからである。

またこの会には会長とか、副会長といった役職も設けていない。会場となっている京都女子大学に籍を置く愛甲と加藤は会場借用の申請の必要から、一応、「代表幹事」というふうに書いてはみても、実のところまったくの世話係にすぎない。つまり会の名前にこだわらない、会の組織にもこだわらないところが、当会のうりと言っ

ていいかと思う。このようなスタンスが当会が今日まで続いてきたもつとも大きな理由のひとつだとも言えよう。

### 活動内容とその成果について

当会でははじめ、韓孟の聯句を読んでいたが、それをすべて読み終わると、『御覽詩』を読みはじめた。これは中唐の元和年間に翰林学士、令狐楚が憲宗の命を受けて編纂したものであるが、いわゆる元和を代表する韓愈や白居易といった詩人たちよりも前の世代の詩が採録されている。この詩集の読解を通じて、逆に韓愈や白居易らの詩がいかに野心的で、刺激的なものであつたかがよく理解できたところで、中唐の詩僧、皎然の『杼山集』を読みはじめたことにした。皎然には他に『詩議』や『詩式』といった著名な文学理論の書があるが、そこで論じられていることと実作との関係に興味があつたからである。そして現在は苦吟の詩人として知られる賈島の『長江集』を巻二まで読み進めている。

当会としての出版物はない。しかし韓孟の聯句の訳注作業は、京都大学（当時）の川合氏と緑川英樹氏（現任）が主催する「昌黎会」での韓愈詩全訳注作業へと発

展していき、すでに川合康三・緑川英樹・好川聡編『韓愈詩訳注』第一冊（二〇一五年四月 研文出版）が上梓されている。皎然の『杼山集』も、大谷大学の乾源俊氏が主編となって『詩僧皎然集注』（共編愛甲弘志・浅見洋二・齋藤茂 二〇一四年三月 汲古書院）が上梓された。そして現在、読み進めている賈島の詩については、訳注担当者の原稿を齋藤茂・愛甲弘志・中木愛・加藤聡の四名が編集整理して、『中唐文學會報』（中唐文学会）に『賈島詩譯註（一）』（第二一号 二〇一四年十月）、『同（二）』（第二二号 二〇一五年十月）、『同（三）』（第二三号 二〇一六年十月）を順次、公表している。

会場を京都女子大学に移した時には参加者は二十人ほどになっていた。そこで上述の詩集の読解作業に加えて、自分たちが研究していることについての構想を披露し、他の参加者らも自らの問題として受け止めて一緒に考えていこうという場を設けることとなった。つまりこれを「話題提供」と称するのは、通常の学会のように、完成形を発表し、御説ごもつともで終わらせないという意図からである。これもまた当会のうりと自負する。具体的題目などについては、日本中國學會の「国内学会消息」を参照されたいが、これまでの話題提供者には国内の研究者はもとより、周裕鍇・張猛・陳正宏・郭英徳・



張健・尚永亮・董乃斌・查屏球・胡可先・汪涌豪・邵毅平・蔡瑜・鄔國平・朱剛諸氏ら数多くの海外の研究者も名を列ねている。当会は会費も徴収しておらず、資金もまったくないので、これら海外の著名な研究者に対してなんら酬いる術がないのにも関わらず、みな快く引き受けてもらった上に、彼らのお陰で国外にも当会の名が広く知られるようになったことはたいへんありがたいことである。

## むすび

前述のように、当会は、川合・齋藤両氏の韓孟聯句の読書会にまで遡る。思うに、川合氏が韓愈の句を、齋藤氏が孟郊の句を担当して読み解いていく作業は、そのむかし韓愈と孟郊が持ちうるすべての力をぶつけ合いながら聯句を巻いていったのと同じような真剣さ、それに加えてたぎる情熱がなければ叶わなかつたにちがいない。この情熱はその後、中唐文学を研究する多くの同学の士の共感を呼び起こし、一九九〇年十月、中唐文学研究会（現在の中唐文学会）が立ち上がるまでになった。このあたりの消息については川合氏が『中唐文学の視角』（松本肇・川合康三編 一九九八年二月 創文社）の

「まえがき」に記しているのでそれを参照されたいが、この時期、間違いなく、中唐文学研究に一大旋風が巻き起こったのであり、それは中国にもよく知られるほどであった。そしてこの東山之會もそのような情熱の産物と言つてよい。しかしこれを単なる遺産として漫然と引きずっていつてはなるまい。今後もこのような研究の場が多くの参加者たちの情熱をより強く掻き立て続けるものでなければならぬ。